

『トレヴー事典』の東アジア関係項目*

小 関 武 史**

- I はじめに～なぜ『トレヴー事典』か
- II 『トレヴー事典』の東アジア関係項目（資料）
- III 『トレヴー事典』の東アジア関係項目の特徴
- IV むすび

I はじめに～なぜ『トレヴー事典』か

本稿の目的は、イエズス会が編集した『トレヴー事典 (*Dictionnaire de Trévoux*)』に収められた東アジア関係の項目のうち、国名を見出しとする項目をすべての版について調査し、その内容を紹介することである。国名以外を見出しとする項目にも、これらの国についての記述は見出されるが、ここでは対象を限定する。

『トレヴー事典』を研究対象に選んだことには二つの理由がある。一つはイエズス会と東アジアの関わりが深かったことであり、もう一つは『トレヴー事典』が18世紀を通じて改訂を重ねており、認識の変化を跡づけるのに向いていることである。項目の紹介に入る前に、以上の二点について概観しておこう。

1 イエズス会と東アジア認識

西ヨーロッパと東アジアの出会いは16世紀にさかのぼる。それ以前にも交流がなかったわけではないが、持続的な関係が成立したのは大航海時代以降のことで

※ 本稿は、2002年6月29、30両日に札幌大学で行われた日本18世紀学会第24回大会において、「東アジアと啓蒙」という共通論題の枠で行った報告に基づいている。日本18世紀学会の年報は、共通論題に関しては要旨のみの掲載という方針を採っている。しかし、『トレヴー事典』に収められたこれらの項目は資料としての価値が高いので、日本18世紀学会の了承を得たうえで、この場を借りて全文を公にさせていただくことにした。

※※ 一橋大学大学院法学研究科講師

『一橋法学』（一橋大学大学院法学研究科）第1巻第3号2002年11月 ISSN 1347-0388

ある。行動を起こすのはもっぱら西ヨーロッパの側であり、西ヨーロッパから東アジアに人が渡り、東アジアの情報が西ヨーロッパに持ち帰られる。しかし、そうした情報が思想史において重要な役割を果たすようになるのは、17世紀末から18世紀前半にかけてのことである。

イエズス会は発足当初から積極的に世界各地に布教に乗り出してゆく。16世紀の半ばには、中国にも日本にも最初の宣教師が渡来した。イエズス会はヨーロッパに広く組織を持っており、各地から人材が供給されている。布教活動それ自体にとっては、宣教師の国籍は大した問題にはならない。しかし、思想史の問題として考えるならば、東アジア情報の受け入れ窓口がどの国になるかは、非常に重要な点である（もっとも、主要な著作がラテン語で書かれているうちは、このような問題は生じなかった）。教皇庁の裁定により、東インドではポルトガルの特権が認められていたが、17世紀の後半になると状況が変わって来る。ポルトガルは衰退しつつあった。非カトリック国のイギリスとオランダにとっては通商と布教は別問題であり、宣教師の保護権を主張して貿易を拡大しようとは考えていない。カトリック国のうち、スペインにはアメリカがある。ポルトガルに取って代わるべき国はフランスしかなかった。かくして、1685年にフランス王ルイ14世はシャム国王に使節を派遣するのだが、その中には六名のイエズス会士が中国宣教師として含まれていた（そのうちの一人はシャムに残ったため、実際に入華したのは五名である）。これ以降、中国情報はフランスに集まり、そこから全ヨーロッパに向けてフランス語で発信されてゆく。

フランス人イエズス会士は、大量の書簡を本国に書き送った。これには典礼問題における弁明という意味もあった。イエズス会は現地の習慣を尊重する方針を採り、祖先崇拝を道徳的なものとして容認し、中国人が「天」という言葉で表わしているのはキリスト教の神に等しいものと見なした。これに対して、ドミニコ会やフランシスコ会は厳格な方針を貫き、祖先崇拝は宗教であり、「天」とは物質的天空であるとした。この見解に従えば、イエズス会は偶像崇拝を認めていることになる。このような論争は17世紀前半に始まり、いったんは沈静化したが、世紀末になって教皇庁や清の宮廷をも巻き込む形で再燃したのである。

ルイ14世に派遣された宣教師の一人であるル・コント師（Le Comte）は、陝

西省や山西省で布教に従事していたが、典礼問題に関するイエズス会の立場を釈明するためにヨーロッパに帰った。その機会を利用して、かねて中国からフランスに向けて発信していた十四通の書簡を二巻本にまとめ、1696年に『シナ現状新誌』という題で出版した¹⁾。この著作は大いに注目を集め、典礼論争という枠を超えて中国についての基本文献として参照されてゆく。

書簡の価値を認めたフランスのイエズス会は、18世紀に入るとこれを順次出版するようになる。最初はル・ゴビヤン師 (Le Gobien)、その死後はデュ・アルド師 (du Halde) が編集に従事した。いわゆる『イエズス会士書簡集』である²⁾。もとより、イエズス会士は世界中に派遣されており、書簡の発信地も多岐にわたっているが、中国から送られて来る書簡は質量共に最も充実していた。この書簡集もまた、最新の中国事情を伝えるものとして重宝されることになる。

1) Le Comte (Louis), *Nouveaux mémoires sur l'état présent de la Chine*, Paris, J. Anisson, 1696, 2 vol. in-8°. (BnF : 8-O 2 N-29 ; 東洋文庫 : O-3-A 18)

東アジアに関するヨーロッパ語の文献は、フランス国立図書館 (BnF) と駒込の東洋文庫に所蔵されているものが多い。検索の便を考慮して、それぞれの図書館における請求記号を書誌情報の後に掲げる。

本書はフランス国立図書館において電子テキスト化されており、インターネット上で全文を読むことができる (BnF : NUMM-88779)。具体的な閲覧方法は以下の通りである。まず、フランス国立図書館のホームページ (<http://www.bnf.fr/>) にアクセスし、「Catalogue BN-OPALE PLUS」をクリックする。すると、電子蔵書目録のページに移る。ここから先は複数の行き方があるが、最も確実な方法を紹介する。「Recherche Simple」をクリックし、切り替わった画面の「Auteur」の欄に「le comte, louis」と打ち込んだうえで、「Lancer la recherche」というボタンをクリックする。Le Comte という姓は珍しくないで、名前の方も入れておかないと後が面倒である。これまでの経験をもとに言うところ、著者名のみで検索した方が確実である。検索結果を見ると、背景がうすい黄色になったところに「Le Comte, Louis」という名前が下線つきで表示されている。それをクリックし、新たに現れた画面で「Voir les notices」というボタンを押す。すると、著作リストの中に「Nouveaux mémoires sur l'état présent de la Chine [Document électronique]」というのがあるはずである。ここで本のアイコンをクリックすると、先ほど示した「NUMM-88779」という番号が表示される。右端に「Visualiser」という文字があり、それをクリックするとようやくテキストが表示される。このように文章で説明すると大変そうだが、慣れれば簡単に辿り着ける。なお、この方法は2002年8月において有効であることを確認したものであり、将来変更されることがあるかもしれない。

2) *Lettres édifiantes et curieuses*, Paris, 1703-1776, 34 vol. in-12. (BnF : H-15961 / H-15994) 中国から送られ来た書簡の主なもの、矢沢利彦による日本語訳で読むことができる。そのシリーズの一冊目である『イエズス会士中国書簡集』(平凡社東洋文庫175)には、この書簡集についての解説が収められている。

書簡集という形式には長所と短所がある。長所は言うまでもなく情報が新しいことであり、短所は記述が系統的でないことである。そこで、『書簡集』の編集者を務めていたデュ・アルド師は、過去の書簡を主題別に整理し、1735年に『シナ帝国全誌』という題で出版した³⁾。フォリオ版で四巻に達する大著である。デュ・アルド自身は中国に赴いた経験がなく、元の書簡を勝手に書き改めている箇所もあるなど、問題点がないわけではない。しかし、系統的に記述されていることの意義は大きく、モンテスキューもヴォルテールも、中国に言及する際には真っ先にこの著作を参照した。

以上のように、17世紀末以降、質の高い中国情報はイエズス会によってフランス経由でヨーロッパにもたらされた。それでは、朝鮮や日本については事情はどうだったのだろうか。まず朝鮮であるが、布教活動が展開されるのは18世紀末になってからのことである。当然のことながら、断片的な情報しか伝わって来ない。一冊全体が朝鮮に当てられた著作はまだ存在せず、中国に関する文献の中で周辺地域の一つとして言及されるにとどまっている。

日本については、よく知られているように、徳川幕府の禁教政策によって17世紀前半には宣教師が追放されている。イエズス会が日本で活動できた期間は百年に満たないが、殉教の土地としての記憶は長く残り、布教史に関する文献は日本撤退後も生産され続ける。たとえば、シャルルヴォワ師 (Charlevoix) には『日本史』という著作がある⁴⁾。しかし、18世紀のヨーロッパにおける日本認識に決定的な影響を与えたのは、イエズス会とは無縁のドイツ人エンゲルベルト・

3) Du Halde (Jean-Baptiste), *Description géographique, historique, chronologique, politique et physique de l'Empire de la Chine et de la Tartarie chinoise*, Paris, chez le P. Le Mercier, 1735, 4 vol. in-fol. (BnF : O2 N-39 (1-4) ; 東洋文庫 : O-3-B 119)

本書もフランス国立図書館によって電子テキスト化されているが (BnF : NUMM-88216)、何かの手違いがあったのか、2002年8月現在、原書第二巻の一部 (pp. 1-223) しか閲覧できない。実は、フランス国立図書館の電子テキストにはこのような不完全なものも散見するので、取り扱いには注意が必要である。電子化された文献は現物の閲覧が不許可になる可能性が高く、電子化されたがゆえに簡単には読めなくなるという皮肉な現象も生じうる。

4) Charlevoix (Pierre-François-Xavier de), *Histoire et description générale du Japon*, Paris, J.-M. Gandouin, 1736, 2 vol. in-4°. (BnF : O2 O-152)

ケンペルの著した『日本誌』であり、シャルルヴォワ師の『日本史』もこれに触発されて書かれたという側面がある⁵⁾。ケンペルはオランダ東インド会社付の医師として、1690年から1692年にかけて日本に滞在した。その経験をもとに記述されたのが『日本誌』であるが、これはケンペルの存命中には日の目を見なかった。イギリスの蒐集家ハンス・スローン卿 (Hans Sloane) がケンペルの遺稿を買取り、これをショイヒツァー (Scheuchzer) に英語に訳させるという形で初版が出る。二年後には早くもオランダ語版とフランス語版が出版されている。18世紀を通じて、ヨーロッパの日本観はケンペルの影響を直接、間接に受けている。

このように、18世紀のフランスにおいては、東アジアに関する情報が充実の度を深めてゆく。ヨーロッパにいながらにして、東アジアについて論じることができるようになり、二次資料が増大したのである。このような二次資料を分析するに際しては、言われたことだけでなく、言われなかったことにも注意を向けなければならない。利用可能であった情報のうち、何を取り、何を捨てたか。そこに執筆者の意図を読み取りうる。イエズス会は東アジア情報の供給源であった（日本については最新の情報を提供していないが、蓄積は十分にある）。そのイエズス会が発行している『トレヴー事典』では、東アジアはどのように記述されているのであろうか。それが本稿の主題であるが、『トレヴー事典』の版本について

5) Kämpfer (Engelbert), *The History of Japan*, London, 1727, 2 vol. 『トレヴー事典』との関わりを考えるうえではフランス語版が重要なので、そちらの書誌情報も記しておこう。 *Histoire naturelle, civile et ecclésiastique de l'empire du Japon*, La Haye, 1729, 2 vol. in fol. (BnF : O 2 O-55 ; 一橋大学社会科学古典資料センター : Franklin 3462 / Franklin 3463)

ケンペルの著作もシャルルヴォワの著作もフランス語では *Histoire du Japon* というが、日本語では前者は『日本誌』、後者は『日本史』という具合に、異なる字で表記するのが慣例になっている。これは両書の性格の違いを反映したものである。ケンペルの『日本誌』は地誌や博物誌、さらには紀行が中心であるのに対し、シャルルヴォワの関心はキリスト教布教史に向けられている。実際、シャルルヴォワはケンペルを評して、これは歴史ではないと断じている。ところで、アベ・プレヴォは様々な旅行記をもとに『旅行記集成』を編纂しているが、日本の部はもっぱらケンペルに依拠して執筆した。ケンペルに浴びせられた批判に対しては、「歴史家の称号を認めないということは、この撰集に入れる資格を十分に認めるということだ」と述べ、旅行記としての質の高さを評価した (*Prévost, Histoire générale des voyages*, t. 10, p. 484.)。両書の相違は18世紀の人々にもはっきりと意識されていたのである。

は複雑な問題があり、そちらを先に検討しておかなければならない。

2 『トレヴー事典』の版本について

イエズス会はリヨン近郊のトレヴーに印刷所を所有していた。この印刷所と縁の深い出版物は二つあり、一つが『トレヴー評論 (*Mémoires de Trévoux* もしくは *Journal de Trévoux*)』、もう一つが『トレヴー事典』である。前者は定期刊行物であり、1701年から1775年まで発行された。後者はその名の通り事典であり、初版は1704年に発行され、最後の版が出たのは1771年である。時期的には両出版物はほぼ重なっており、イエズス会の言論活動を把握するには両方を調べるのが重要である。しかし、『評論』にまで一挙に調査の幅を広げると収拾がつかなくなる恐れがあるので、今回は『事典』を対象を絞った。

さて、これまで一貫して『トレヴー事典』という表記を用いて来たが、正式名称は『フランス語およびラテン語普遍事典 (*Dictionnaire universel françois et latin*)』という。本文の説明はフランス語で記述されているが、見出し語に対応するラテン語訳が添えてあることと、ラテン語をもとにフランス語の単語を調べるための語彙集が添えられていることから、このような書名がつけられたのである。しかし、『トレヴー事典』という俗称の方が通りがよいので、本稿でもこちらの呼び方を採用する。

上述のように、『トレヴー事典』の初版は1704年に発行された⁶⁾。フォリオ版で三巻から成り、一ページが三段組で印刷されている。ページを示す数字は振られていない。本文に先立って、書肆エチエンヌ・ガノーによるドンブ公への献辞 (EPISTRE)、序文 (PREFACE)、マドリガル (MADRIGAL) という歌曲の詩、および著者一覧表 (TABLE DES AUTEURS) がある。後続の諸版と比べると、この版には国名を見出しとする項目が存在しないという際立った特徴がある。ま

6) *Dictionnaire universel françois et latin*. Paris, E. Ganeau, 1704, 3 vol. in-fol. (BnF : MICROFICHE M-1000 (1-2)) 第二版以降については、いちいち表題は記さない。蔵書目録等では発行地がパリになっているが、タイトル・ページの書き方から察するに、トレヴーで印刷されたものがパリの書肆ガノーによって配布されたということのようである。NACSIS Webcat のデータベースにはこの版は存在しなかった。

た、外国の記述の際に必ず問題になる宗教関係の項目も見当たらない。したがって、東アジアについてまとまった記述を見出すことはできない。

初版の評判はあまり芳しくなかったようである。新たな版がエチエンヌ・スーシェ師 (Étienne Souciet) を中心に準備され、1721年に刊行に漕ぎ着けた⁷⁾。フォリオ版で五巻という大部な著作となり、内容も一新された⁸⁾。以後の版はすべてこの第二版と連続しており、全面的な書き換えは行われていない。改訂は加筆という形でのみ行われる。そこで、第二版以降に共通する特徴をいくつか指摘しておこう。まず形態面から述べると、一ページは二段組に変更され、それぞれの段に数字が割り振られている⁹⁾。内容面では項目の立て方が変わり、国名が見出しに採用されるなど、言語辞典から百科事典へと変貌を遂げた。東アジアに関する項目もこの版で初めて登場している。本文中に残された数字から、執筆時期も特定しうる。すなわち、第一巻所収の項目 CHINE は1715年に、第三巻所収の項目 JAPON は1717年に、それぞれ書かれたと見なしうる。詳細については、項目を紹介する際に注記する。

第三版は1732年に発行された¹⁰⁾。これは第二版を複製した版らしく、ほぼすべての項目が同じページにある。もっとも、細かく見ると綴り字などに異同がある。

第四版は二種類存在する。このことが『トレヴー事典』の版本をめぐる問題を複雑にしており、第何版という数え方に混乱をもたらしている¹¹⁾。

7) Paris, F. Delaulne, 1721, 5 vol. in-fol. (BnF: MICROFICHE M-679 (1-5); 電子テキスト NUMM-50962 / NUMM-50966) なお、この版のみ、リプリントがフランス国立図書館の Salle V に配架されている。(447.03 TREV 1-5)

8) しかしながら、初版の序文はほぼそのままの形で第二版に転用されている。もちろんそれだけでは新しい版を発行するに至った経緯を説明できないので、追加された部分もあるが、使えるものはそのまま使うというのが『トレヴー事典』を貫く原則的方針である。

9) ただし、羅仏語彙対照表は一段組である。また、1771年版では一ページに一つの数字を振るという通常の方法が採られている。

10) Paris, J.-M. Gandouin, 1732, 5 vol. in-fol. (BnF : MICROFICHE M-680 (1-5) ; 電子テキスト NUMM-50967 / NUMM-50971)

11) 実を言うと、『トレヴー事典』のタイトル・ページには第何版という数字は記載されていない。初版以外はどれを見ても「新版 (Nouvelle Edition)」としか記されていないのである。混乱を避けるため、これより先は原則として出版年によって版本の区別を立てるようにする。

最初の第四版（何とも奇妙な言い方だが）は、1740年にナンシーで発行された¹²⁾。発行地がパリでないのはこの版だけであり、献呈されているのもロレーヌ公（ポーランド王）になっている。二つ目の第四版はその三年後にパリで発行されている¹³⁾。いずれも六巻本であるが、内容にはずれがある。1743年のパリ版は、順序からすると第五版となるはずであるが、ドンブ公への献辞と序文との間に置かれた「今次の版について (AVIS SUR CETTE ÉDITION)」という説明は、このような書き出しで始まっている。「パリの出版者連合は、『トレヴー事典』の新しい版を企図した。これには先行する三つの版のみならず、他のあらゆる事典よりも優れた点が多々あるはずである¹⁴⁾」。先行する版は三つであると明記されている。ナンシー版は数に含まれていないのである。奇妙な沈黙と言うしかない。

1743年のパリ版には、1752年に発行された第七巻が補遺として追加されている¹⁵⁾。この補遺に収められた項目には、サヴェリーの『通商事典¹⁶⁾』やブリュザン・ド・ラ・マルティニエールの『地理大事典¹⁷⁾』から引き写された項目が目立つ。ほとんどの場合、見出し語と冒頭の一文（あるいはもう少し）のみをそのまま写すという方法が採られている。『通商事典』は1721年から1730年に初版が出たが、典拠としては1741年に出た増補改訂版が極めて有力である。この点では『トレヴー事典』と『百科全書』は共通している。一方の『地理大事典』は1739年から1741年にかけて発行されており、『トレヴー事典』としては1743年版

12) Nancy, Pierre Antoine, 1740, 6 vol. in-fol. (BnF : X-548 / X-553)

13) Paris, Veuve Delaulne, 1743, 6 vol. in-fol. (BnF : X-554 / X-559) NAC-SIS. Webcat のデータベースから判断すれば、日本に持ち込まれた第四版はこのパリ版が主流で、ナンシー版は数が少ない。

14) *Dictionnaire de Trévoux*, Paris, 1743, «Avis sur cette édition», p. 1.

15) *Supplément au Dictionnaire universel françois et latin*, Paris, Compagnie des Libraires associés, 1752, 1 vol. in-fol. (BnF: X-567)

16) Savary Des Bruslons (Jacques), *Dictionnaire universel de commerce*, Paris, Jacques Estienne, 1723-1730, 3 vol. in-fol. (BnF : V-5719 / V-5721) ; Nouvelle Edition, Paris, la Veuve Estienne, 1741, 3 vol. in-fol. (BnF : V-5722 / V-5724)

17) Bruzen de La Martinière (Antoine-Augustin), *Le Grand Dictionnaire géographique, historique et critique*, Paris, P.-G. Lemercier, 1739-1741, 6 vol. in-fol. (BnF : G-476 / G-481)

にその成果を取り入れる時間的余裕がなかったのであろう。この二種類の事典を取り込んだことにより、『トレヴー事典』はますます百科事典的色彩を強めてゆくことになる。

1743年版への補遺が出版された1752年には、第五版が出版されている¹⁸⁾。これは1743年版とその補遺とをアルファベット順に整理した版で、七巻より成る。前年に第一巻が出た『百科全書』からは、内容においては影響を受けていない。しかし、この年に第五版が出たこと、あるいは第四版への補遺が出たことは、『百科全書』への対抗措置だったのかもしれない。

『トレヴー事典』の最後の版は1771年に出版された¹⁹⁾。巻数はさらに一つ増え、とうとう八巻に達した。『百科全書』はすでに図版以外が完結しており、『トレヴー事典』が『百科全書』に言及するケースも生じている。

以上を表にまとめると、次のようになる。

版	出版年	発行地	巻数
1	1704	パリ	3
2	1721	パリ	5
3	1732	パリ	5
4 N	1740	ナンシー	6
4 P	1743	パリ	6
4 補遺	1752	パリ	1
5	1752	パリ	7
6	1771	パリ	8

これで『トレヴー事典』の版本については概略を説明したことになるが、各版

18) Paris, Compagnie des Libraires associés, 1752, 7 vol. in-fol. (BnF: MICRO-FICHE M-526 (1-8) ; 電子テキスト NUMM-50972 / NUMM-50978)

19) Paris, Compagnie des Libraires associés, 1771, 8 vol. in-fol. (BnF: MICRO-FICHE M-525 (1-7) ; 電子テキスト NUMM-50980 / NUMM-50987) フランス国立図書館における電子テキスト化は日々進行中である。『トレヴー事典』に関して言えば、すべての版本が電子化されているわけではなく、電子化された版の中でも一部が閲覧不可能だが、こうした不完全な状態はいずれ解消されるであろう。

の系譜を家系図になぞらえると分かりやすいだろう。1704年版と1721年版の間には血のつながりがなく、いわば養子縁組をしたようなものである。1732年版は1721年版のクローン同然である。四代目には1740年ナンシー版と1743年パリ版という兄弟が出たが、1752年版という後継ぎを得たのは1743年版の方である。そして1771年版までで家系が断絶する。

3 更新されない情報

本稿の冒頭において、『トレヴー事典』は認識の変化を跡づけるのに適していると述べたが、実際には認識が劇的に変化することはついになかった。初版にとっての第二版を除き、新しい版はいずれも以前の版の全面的な改訂にはなっていない。土台となる部分は（序文でさえも）残されたまま、新しいテキストが付け足されてゆく。それは改訂というより、むしろ増補と呼ぶのがふさわしい。東アジアについての認識も、最初に盛り込まれた1721年版から半世紀後の1771年版に至るまで、ほとんど変化が見られない。その間、新しい情報がもたらされなかったわけではない。それどころか、中国と日本については、まさにこの時期に系統的な紹介がなされたのである。しかも、中国情報を積極的に供給したのはイエズス会である。

それでは、なぜ『トレヴー事典』は古びた情報を流し続けたのだろうか。残念ながら、決定的な説明は見当たらない。ただ指摘できることは、古い情報を維持したまま新しい情報を継ぎ足すという方法がこの時代には一般的だったということである。『トレヴー事典』の他の項目はもちろんのこと、他の事典でも事情は似たようなものである。たとえば、モレリの『歴史大事典 (*Le Grand Dictionnaire historique*)』は著者の死後も改訂版が繰り返し出ているが、そのまま残されている項目が多い。事典以外の著作でも、ヴォルテールは同様の手法によって『風俗試論 (*Essai sur les mœurs*)』に改訂を加え続けた。このように見てくると、なぜ古びた情報をそのまま残すのかという問題設定自体が筋違いであるようにも思われる。新しい版には、しばしば「訂正され、増補された (*corrigée et augmentée*)」という形容がつけられている。つまり、新しい版を出すということは、明らかな誤りを正し、新しい情報を付け加えることなのである。

II 『トレヴー事典』の東アジア関係項目 (資料)

凡例

- (1) 以下に掲げるのは、『トレヴー事典』に収録された東アジア関係の概論項目を日本語に訳したものである。中国、朝鮮、日本の三カ国について、国名とその派生語を見出しとする項目に採録対象を限定した。
- (2) 前章で述べた『トレヴー事典』の成立事情に鑑み、原形と言うべき1721年版を底本とした。後の版で変更された部分は、以下の記号によって容易に識別できるようにした。

< > 加筆

{ } 削除

【 】 修正 修正箇所については、まず1721年版のテキストを掲げ、ついで【 】の中に修正後のテキストを示す。

記号内の数字は、そうした変更が何年版から生じているかを表わす。{1771}とあれば、1721年版から1752年版まで維持されていたテキストが1771年版で削除されたという意味である。1743Sは1752年に発行された1743年版への補遺のことで、<1743S>とあれば、その部分は1743年版への補遺で初めて付け加えられ、1752年版以降は本文に組み込まれたことを示す。

- (3) [] 内は原文の綴りや訳者による補足説明である。固有名詞の同定については完全を期するのが難しく、原文を添えるのが適切であると判断した。表記に問題があれば、ぜひ指摘していただきたい。
- (4) 見出し語はゴシック体で表示した。
- (5) 項目中で言及された文献については、注で書誌情報を記すよう心がけた。
- (6) 数字の表記が乱れているように見えるが、アラビア数字はそのまま残し、ローマ数字やフランス語の文字で書かれた数字は漢字に直した結果である。

1 中国関係項目

シナ [CHINE]。女性名詞。アジアの大王国で、わが大陸の最も東の地域を占

めている。*Sina, Sinarum regio, China*. ル・コント師 [le P. Le Comte] の新誌第一巻36ページによれば、シナは南北方向にかけて23度から41度まで広がっている²⁰⁾。つまり18度で、450リユーになる。東西の広がりもほぼ同じである。そもそも、シナはほぼ円形なので、周囲千四百リユー近くになる。この神父の言によれば、この計測は正確で、精密な観測に基づいているという。{1771 皇帝はシナ在住のイエズス会士およびその他の修道会の宣教師たちに命じてこの広大な帝国の地図を作成させたが、その地図がヨーロッパにもたらされれば、われわれはもっと詳しく知ることができるだろう。} それに、今述べた中にはいくつかの島は含まれていないが、それだけでも大帝國になるほどである。また、長城の外にあるリャオトン [遼東: Leauton] も入っていない。コレ [高麗: Corée]、トンキン [東京: Tunquin]、およびシャム [Siam] について言えば、実際これらの国々は皇帝に朝貢しているばかりでなく、王位継承の際には皇帝によって任命ないし承認を与えられてもいる。とはいえ、これらの国々には固有の政府があり、シナとは大いに異なっているのである。アブール・ファラジ [Abulpharage] はその著第一王朝において、シナ人を世界の始めに存在した六つの民族の一つに数えている²¹⁾。アブール・ファラジによれば、彼らはシン [Sin] と呼ばれ、居住可能な土地の最も東 {1771 の国} に住み、昼夜平分線 [赤道] から北にかけて、七つの気候帯のうちの最果てに至るまでの地域に住んでいるという。また、彼らは器具の製造や絵画にかけてはどの民族よりも優れているということだ。アブール・ファラジが記述した十三世紀においては、東洋についての概念はこのようなものだった。

シナは住民の勤勉な労働によって耕されている。彼らは原野をことごとく平らにし、山でさえも平原に変えた。段々畑は階段教室のように上まで続き、運河が

20) 典拠として示されたル・コントでは、23度の広東から40度の北京までで17度になるが、広東と北京の先に広がる国境地帯を考慮に入れれば18度分になるという説明の仕方になっている。Le Comte, *Nouveaux mémoires*, t. 1, pp. 36-37.

21) アブール・ファラジ (Abu al-Faraj : 1226-1286) はバル・ヘブライウス (Bar-Hebraeus) の名で知られるシリアの学者で、改宗ユダヤ人である。シリア語で書かれた主著『世界史要』をアラビア語に訳した『諸王朝略史』という著書があり、本文中の第一王朝とはその第一部を指すものと思われる。

全国に行き渡っている。そのため、無駄にされた土地などほとんどなく、原野は庭のようである。それに、シナではわがヨーロッパの産物はアーモンドを除いて全部とれるのに、その他にもわれわれが知らないものがたくさん収穫できる。それにもかかわらず、住民を養うには土地が足りない。それほど人口が多いのである。毎日のように、生まれて来たばかりで親に捨てられる子供たちが無数にいる。親にしても子を養ってやることができないのである。

シナの省は、北においては北直隸 [Pekeli]、山西 [Xansi]、陝西 [Xensi]、山東 [Xantung <1771 ou Xanton>]、河南 [Honan] および四川 [Suchuen] であり、南においては湖広 [Huquang <1771 ou Huquam>]、江西 [Kiangsi]、南京 [Nankin]、浙江 [Chekiang]、福建 [Fokien]、広東 [Quangtung]、広西 [Quangsi]、貴州 [Queicheu 【1740 Quelcheu】]、および雲南 [Junnan <1771 ou Yunnan>] である。シナの大河はホアン [黄：Hoangs] すなわち黄色い川とキアン [江：Kiang] すなわち青い川、それにカントン [広東：Canton] すなわちタ [Ta] である。シナの都市は軍事都市もしくは行政都市である²²⁾。両方ともいくつかの等級に分けられている。第一等の軍事都市は千以上あり、第二等、第三等のものはもっと数が多い。第一等の都市について言えば、北京²³⁾以上もしくは北京と同じくらいの大都市がいくつかある。ル・コント師は自分一人だけでもそういう都市を七つか八つ見たと言っている。第一等の都市は八十あり、それらはリヨンやボルドーに匹敵する。第二等の都市二百六十の中には、オルレアンのようなものが百以上ある。第三等の都市千二百の中には、ラ・ロシュルやアングーレムほどの大きさのものが六百以上ある。規模や住民の数からすればマレーヌやサン・ジャン・ド・リュズを上回る村がおびただしい数に上るのは言うまでもない。

22) これより先、都市についての記述はル・コント『シナ現状新誌』第一巻第三書簡 (t. 1, pp. 116-197.) に基づく。「第一等の都市について言えば」以下は、原著186ページの丸写しに近い。

23) ル・コントの原文ではパリとなっている。筆写の際に、ParisをPekinとしてしまったのだろう。中国の都市の大きさをフランス人読者に理解してもらうことが目的なのだから、フランスの都市を引き合いに出すのが筋であり、実際、リヨン以下はそうになっている。

シナの皇帝は絶対的である²⁴⁾。法によって、皇帝にはほとんど限度のない権威が付与されている。二つの顧問会議が存在するが、一方は通常の会議で、閣老 [Colaos] という大臣によって構成されている。他方は特別の会議で、宗家の皇子によって構成されている。北京には最高官庁が六つある。吏部 [Ljipou 【1771 Lipou】]²⁵⁾ は、われわれがマンダラン [Mandarins] と呼ぶ国家の官吏を管轄し、戸部 [Houpou] は財政に関わる。礼部 [Lipou] は宗教、古い慣習、学問、芸術、外交を司る。兵部 [Pimpou 【1771 Pinpou】] は戦争に、刑部 [Himpou] は犯罪に、工部 [Compou] は公共工事に関わる。マンダランはいずれも博士であり、九の等級のマンダランが13647人いる。

シナには主要な宗教が四つある²⁶⁾。古いものは国家の宗教であり、唯一の神を認めている。神は至高で、天と地の主である。偶像を認めず、それをかたどる彫像もない。偶像崇拜が第二の宗教である。これは仏 [Fohe, ou Fohi²⁷⁾] というインドの哲学者によって、キリスト生誕の32年前に当地にもたらされた。また、大勢の無神論者がいる。最後に、キリスト教が根づいた。聖ザビエルが書簡集第二巻の第三書簡で述べていることによれば、聖トマスが福音を伝えにやって来たと信じる人が大勢あって、ポルトガル人がインドに来る前にギリシア教会が司教を遣わしていたという。そして、この聖なる使徒が多くの人を改宗させたと言い伝えられて来たというのだ。ル・コント師は第二巻の196ページでその証拠を挙げている。確かなことは、キリスト紀元737年頃、モスル [Mosul] とバッソラ [Bassora] のシリア宣教師たちが、サマルカンドやボチャラ [Bochara]、その他韃靼の大都市への隊商に従ってシナに赴き、キリスト教をもたらしたというこ

24) この段落の記述は、ル・コント『シナ現狀新誌』第二巻の第一書簡 (t. 2, pp. 1-130.) のうち、主として29-30ページをふまえている。ただし、原著にはマンダランの数は記載されていない。『トレヴー事典』はこれらの役所の名前を見出しに立てて、簡単な説明を施している。

25) ヨーロッパの文献では、後出の礼部との区別がついていない場合がある。

26) この段落の記述は、ル・コント『シナ現狀新誌』第二巻の第二書簡 (t. 2, pp. 131-191.) および第三書簡 (t. 2, pp. 192-263.) をふまえる。

27) この時代のヨーロッパの文献において、Fohi は中国の建国者に擬せられる伏羲を指すのが普通であり、仏を指す場合は Fo や Foé と表記するのが一般的であった。

とである。フルーリ [FLEURY²⁸⁾]。

近時に至り、聖ザビエル [S. Xavier] が苦勞して入国し、1552年にこの大帝国の玄関口で死亡した。それ以来、1581年にルッジエーリ師 [le P. Roger] が入国し、リッチ師 [le P. Ricci] が後に続いた。さんざん苦勞した末、彼らは1584年に当局より定住の許可を得た。キリスト教は大いに進展を遂げた。現在(1715年) 統治している【1715年に統治していた²⁹⁾】皇帝が、いとも立派で、なおかつ宗教にとっていとも好意的な勅令を發布し、布教と信仰の自由を認めてからは、特にそれが目覚ましい。1625年、陝西省 [Chensi³⁰⁾] の首都である西安府 [Signanfou] において、キリスト教の教義の要諦を記した碑文が発見された。それによると、ユダヤ地方から宣教師が到来したが、一人はオロプエン [阿羅本：Olopouen]、もう一人はイホ [I-ho] という名であったという。オロプエンは海でも陸でも多くの危険に遭遇した末に、キリスト紀元636年にシナに到着した³¹⁾。皇帝は坊主 [Bonzes] たちの反対を押し切ってキリスト教に好意を示したが、坊主たちのせいで大々的に迫害が起こり、ついに782年にこの碑文が作

-
- 28) フルーリ枢機卿 (1653-1743)。この事典の著者の一人として名前が挙げられている。
- 29) この記述により、項目が執筆された年(それはまた『トレグー事典』各版を通じて繰り返される中国像が提示された年でもある)を1715年と特定しうる。「現在(1715年) 統治している」と現在形で記しているのが、1721、32、43年の各版、「1715年に統治していた」と過去形で記しているのが、1740、52、71年の各版である。二種類の第四版である1740年版と1743年版とで記述がずれており、互いに関知していなかったことの傍証となりうるのではなからうか。なお、この皇帝とは康熙帝のことであり、在位は1661年から1722年であった。初めて記述が変更された1740年においては、帝位はすでに雍正帝を経て乾隆帝に移っている。
- 30) 陝西省は先に Xensi と綴られていたが、この項目の執筆者がこの二つを同一と認識していたかどうかは不明である。この辺りの記述は、固有名詞の綴りも含めて、Le Comte, *op. cit.*, t. 2, p. 197. 以下と合致する。
- 31) 大秦景教流行中国碑には、「大秦国有上徳曰阿羅本占青雲而載眞經望風律以馳艱險貞觀九祀至於長安(大秦国にすぐれた僧があり、名を阿羅本といった。青空に導かれて眞実の經典をもたらし、風の向きに従って艱難辛苦を乗り越え、貞觀九年に長安に辿り着いた)」とある。中国に福音をもたらした人物としては阿羅本一人が挙げられるだけであり、I-ho が何を指すかは不明である。この段落の典拠となったル・コントにもI-ho という名前は見られない。貞觀九年は西暦635年であり、碑文が作られたのは建中二年すなわち西暦781年であるから、本項目(およびル・コント)の示す年代は一年ずつ遅れていることになる。なお、景教碑文の本文と字訳については、佐伯好郎著『景教碑文研究』、大空社、1996年(1911年に発行された待漏書院版のリプリント)に依拠した。

られたという。この碑文は西安府の近くのパゴダに保存されているが、所有しているのは坊主たちである。キルヒャー師 [Kirker³²⁾] が『シナ図説』において、この碑文の報告と説明を行っている。テオフィリウス・スピゼリウス『シナの文物について³³⁾』。

シナの陶磁器³⁴⁾、シナの墨、シナの漆。これらの語については該当箇所を見よ。シナの陳列室、シナの紙。シナの皇帝、シナ帝国。シナにいる宣教師やフランス人は「シナに行く [aller en Chine]」「シナにとどまる [demeurer en Chine]」と言う。しかし、フランスにいるわれわれは「シナに行く [aller à la Chine]」「シナにいる [être à la Chine]」と言う³⁵⁾。

シナについては以下のような文献がある。キルヒャー師の『シナ図説』、マルティヌス [Martinus] の『アトラス³⁶⁾』——これはブラウの大アトラスの六巻に当たる——、スピゼリウスの『シナの文物について』、イエズス会士ニコラ・

-
- 32) 正しくは Kircher と綴る (この表記法もル・コントに由来する)。1667年にラテン語で『シナ図説 (*China... illustrata*)』を著した (BnF : O2 N-18)。フランス語訳は三年後の1670年に *La Chine illustrée* という題で出版されている (BnF : O2 N-20)。いずれも出版地はアムステルダムである。『シナ図説』に折り込まれた大秦景教流行中国碑の模本は、ホイムの『シナの植物 (*Flora sinensis*)』(1656) からそのまま写されたものであるという (中野美代子『『シナ図説』の想像力』、ジョスリン・ゴドウィン著『キルヒャーの世界図鑑』、工作舎、1986年、248-249ページ)。しかし、私がフランス国立図書館で閲覧した『シナの植物』の版本は、テヴノー (Thévenot) による *Relations de divers voyages curieux* の一部を成す30ページの簡略版 (BnF : MICROFILM M-1083(3)) で、碑文の模本は存在しなかった。ミショーの人名事典によれば本書はフォリオ版で75ページあるそうなので (Michaud, *Biographie universelle*, t. 5, p. 390.)、版によってかなりの違いがあるのだろう。なお、キルヒャーには『シナ図説』の他に1678年に出版された *Romani collegii societatis Jesu Musæum celeberrimum* という著作があり (BnF : V-5210)、8ページと9ページの間に碑文の模本が挟み込まれている。
- 33) Theophilus Spizelius, *De re literaria Sinensium commentarius*, Lugd. Batavorum, 1660. (東洋文庫 : O-3-D 1)
- 34) この段落では、言語の辞典としての役割を果たすために *Chine* を含む単語の用例が列挙されている。
- 35) *Chine* の前にどの前置詞を使うかが問題になっている。通常は、女性名詞の国名には *en* を用いるが、18世紀には *Chine* のように馴染みのうすい国名の場合に *à* を用いた。現在では宣教師の言い方のように *en Chine* という言い方が一般化した。
- 36) Martini (Martino), *Novus atlas sinensis*, Amsterdam, J. Blaeu, 1655. マルティニ師の『シナ新図』は中国地誌についての基本文献で、各国語に翻訳されている。私が主として参照したのはフランス語版 (BnF : Ge.DD.1210) であるが、出版年は明示されていなかった。

トリゴウ師 [le P. Nic. Trigault] の『シナ王国誌³⁷⁾』、セメード [Semedo] の報告記³⁸⁾、プレイエリウス [Preyelius] の『シナとヨーロッパ³⁹⁾』、ニキポサ [Nikiposa] という名のモスコヴィア人によるシナ報告記⁴⁰⁾、ル・コント師の『新誌』、<1743 デュ・アルド師 [le P. Duhalde] の『シナ帝国全誌⁴¹⁾』>等々。

シナという名はシナでは用いられていない。これはシナ人が自分たちの国につけた名ではないのである。彼らは国を中国 [Chungoa] すなわち中央の王国と呼ぶ。また中華 [Chunque] すなわち中央の庭とも呼ぶ⁴²⁾。なぜなら、彼らによればシナは世界の中央にあるからである。鞑靼人はシナをマンジン [Mangin] と呼ぶが、これは野蛮人という意味である。また、ハン [Han] やカタイ [Catay] という名もつけている。他の説によれば、カタイは北部諸州のみを包含し、マンジンが南部諸州を含むという。シャムやコーチシナでは、シナはチン [Cin] と呼ばれている。これはクレスス [Crésus リディア王] の時代、およそ紀元前550年頃に統治していた皇帝家の名前に由来する。[フランス語の] Chine という名もラテン語の Sina という名もここから作られた。というのは、何人かの学者によれば、シナはこの頃から知られ始めたからである。

シナ [CHINE]。女性名詞。シナ人の偶像。 *Idolum Sinicum*. シナすなわちシナ人の偶像は精妙な細工を施したピラミッドの形に作られている。モレリ1712年

37) Trigautius, *Regni Chinensis descriptio*, Lugd. Batav., 1639. (一橋大学社会科学古典資料センター: Menger Lat. 441)

38) Semedo, *Histoire universelle de la Chine*, Lyon, 1667. (BnF: 4-O 2 N-202; 東洋文庫: O-3-B 78) 日本語訳(抄訳)は岩波書店の大航海時代叢書の中に、リッチの『中国キリスト教布教史』との合本として収録されている。

39) Preyelius, *Artificia hominum miranda naturæ in Sina & Europa*, Francofurti ad Mœnum, 1655. (BnF: G-9148)

40) 詳細未詳。

41) 『トレヴー事典』がデュ・アルドに言及したのは1743年版以降で、1740年版まではル・コント師の著作まででリストは終わっていた。文献リストについては、これが唯一の変更点である。

42) 華という字はただちに庭を意味するものではないので、Chunque に対応する漢字が「中華」でよいかどうかは疑問が残る。

版⁴³⁾。現地の人々はこのシナをひどく恐れている。同書。この単語がよでも見出されるかどうかよく分からない。これまでのところ、私は他のフランス人著述家においてこの単語を見かけたことがない。

シナ [CHINE]。女性名詞。SQUINE を見よ⁴⁴⁾。シナはフランス語ではない。アンチルにはにせもののシナの根が生えている。P. DU. T. T. I. p. 96.

<1771 シネに織る [CHINER]⁴⁵⁾。動詞。手工業の分野で新たに作られた用語。布をシネに織るというのは、鎖状になった糸に様々な色をつけ、糸の上に配置した色彩によって布にデッサンが現れるようにすることを指す。>

<1771 シネに織られた [CHINÉ, ÉE]。分詞。シネに織られた布。

また、このように布に手を加える技術をシネ [chiner] (男性名詞) と言う。シネは技術に関して想像しうる限り最も微妙な操作の一つである。『百科全書』⁴⁶⁾。>

Dictionnaire de Trévoux, 1721, t. 1, colonnes 1768-1770.

シナ人 [CHINOIS, OISE]。Sina, Sinensis。男性名詞および女性名詞。シナの住人、シナ現地の人。アブール・ファラジによると、シナ人は人口においても、帝国の偉大さにおいても、そして所有する土地の広さにおいても、他のすべての

43) Moréri (Louis), *Le Grand Dictionnaire historique*, 1759, t. 3, p. 626b. 私が閲覧できたのは、モレリの『歴史大事典』の1759年版のリプリントのみである。『トレヴー事典』が1712年版を掲げるのは、それが項目執筆時における最新版だったからであろう。

44) 『トレヴー事典』の1721年版には SQUINE という項目は存在しない。1752年版では見出しが立てられているが、そこには『通商事典』の ESQUINE を見よという参照指示があるばかりである。『百科全書』第十五巻にはジョークル執筆による項目 SQUINE があり、多くの文献が典拠として掲げられている。しかし、『トレヴー事典』末尾の P. DU. T. T. I. p. 96. に相当するものは見当たらない。

45) この項目は『百科全書』第三巻に収録されたディドロ執筆の *CHINER の冒頭を丸写しにしている (*Encyclopédie*, t. 3, p. 339a)。なお、Hermann 版ディドロ全集では、この冒頭部は省略されている。

46) *Encyclopédie*, t. 3, 339b. 『百科全書』第三巻の出版は1753年である。『トレヴー事典』との比較で言えば、1771年版のみが『百科全書』より後に出たことになる。『トレヴー事典』の編集者が『百科全書』を意識していたことは、この項目の参照指示からも明らかである。しかし、新たに取込まれた項目は別として、従来の記述を『百科全書』に基づいて訂正した形跡は見られない。一方、『百科全書』の項目には『トレヴー事典』からそのまま写したとおぼしき項目が、ディドロ執筆のものを中心に多数存在する。

民族に勝っているという。また、彼らは器具の製造の器用さや絵画にかけても他民族より優れている。ここでアブール・ファラジが言おうとしているのはシナの彩色法と漆のことだけである。というのも、残りの点については、シナ人は絵画のことがまるで分かっていないからである⁴⁷⁾。同じ著者によれば、シナ人は世界の始めに存在した七つの民族の一つである⁴⁸⁾。シナ人の民間に伝わる歴史では、彼らの帝国が樹立されてから四万年以上が経つという。しかし、知識人が一致して認める歴史に従うことにしよう。こちらは筋が通っていて、詳細であり、確固たる伝統に基づいているわけだから、彼らの中にあってもこれを疑うことはできないだろう。もし疑えば物笑いの種になるし、彼ら自身も言うように、異端になるだろう。こちらの歴史に従えば、シナには四千年以上前から国王がいるということになる⁴⁹⁾。ティユモン [Tillemont] はその著皇帝伝⁵⁰⁾の第3巻519ページにおいて、273年にアウレリアヌス帝のもとに使節と貢物を携えて数人のオリेंट人とともに来訪したセレス人 [Seres] がシナ人だったと記している。

<1743S デルプロ氏 [M. d'Herbelot] によれば、シナ人は学識の大部分をインド人から受け入れたという⁵¹⁾。孔子はインドの博士によって哲学に導かれた。ベントリー [Bentley] 博士にならってピタゴラスを紀元前605年に生まれ

47) 中国人の芸術（美術や文学）に見るべき点がないという見解は、『百科全書』においても踏襲されている。美術に関してはジョクールが方々が趣味の悪さを指摘し (PEINTURE MODERNE, XII, 277a)、演劇についてはディドロが不完全であると批判している (*CHINOIS, (PHILOSOPHIE DES), III, 347a)。

48) 先にアブール・ファラジが引用されていた箇所では、民族の数は六つとなっていた。

49) 中国の歴史の古さは、キリスト教会にとって大問題であった。聖書の年代記によれば、現存の民族はすべてノアの末裔のはずである。ところが、中国の年代記が正しいとすれば、中国人は大洪水の前から帝国を築いていたことになる。そこで、一方では中国の歴史を否定するための文献学的研究が推進され、他方では聖書を再検討して大洪水の年代をさかのぼらせる努力が積み重ねられた。なお、項目執筆者は明示していないが、この箇所はル・コントの丸写しである。Le Comte, *op. cit.*, t. 1, pp. 254-255.

50) Le Nain de Tillemont (Sébastien), *Histoire des empereurs et des autres princes*, Paris, C. Robustel, 1690, 6 vol. in-4°. (BnF : H-2564 / H-2569) 出版年については詳細が分からないが、第三巻は1691年のものが最も古いようである。

51) Barthélemy d'Herbelot に *Bibliothèque orientale* (1697) という著作があるが、これが情報源かどうかは特定できなかった。

たとすると、孔子より前の時代の人物ということになるが、ドッドウェル [Dodwell] やスタンリー [Stanley] に従って紀元前567年もしくは568年が誕生の年とすると、孔子の同時代人ということになる⁵²⁾。なぜなら、クープレ師 [le P. Couplet] によれば、孔子は紀元前551年に生まれたからである。ヒエログリフ論、503ページ⁵³⁾。>

エカール [Eccard] という名の北の賢者⁵⁴⁾は、シナ人こそヘロドトスの言うアルギッパイオイ族⁵⁵⁾だと主張している。当時、彼らは山地に住んでおり、その後平野に下りてきたのだという。これは彼らの歴史と合致させるのが難しい。

シナの [CHINOIS, OISE]。形容詞。シナのもの、シナに属するもの。Sinensis。自尊心を脇において言えば、シナ民族に偉大な性質があったことは認めねばなるまい。人付き合いにおいては実に穏やかな気性で礼儀正しく、仕事においては良識があって秩序を守る。公共の利益に熱心で、政治に関しては正しい考え方をしている。実のところ、思弁的学問の分野で示す知力は並以下に過ぎないが、道徳にかけては実直で信頼できる。ル・コント師⁵⁶⁾。シナの言語は地上で使われているどの言語とも似ていない。単語は330しかなく、それらはみな一音節であるか、もしくは非常に窮屈に発音するので一音節しか聞き分けられないようなものなのである。同じ単語を声の抑揚で強く発音したり弱く発音したりして、様々な語義が生まれる。したがって、シナの言語を正確に発音すると、一種の音

52) ここに名前の挙がった三人の学者 (Richard Bentley, Henry Dodwell, Thomas Stanley) は、いずれも1690年代に研究業績を発表している。

53) クープレ師には孔子についての著作がある (*Confucius, Sinarum philosophus*, Paris, 1686-1687, 2 vol. in-fol. BnF : R-816 / 817)。ここでヒエログリフ論とあるのは、ウォーバートン (Warburton) の *Essai sur les hiéroglyphes des Égyptiens* を指すものと思われる。1744年にパリで出版された二冊本 (BnF : G-13329 / 13330) の第二巻には、ニコラ・フレレ (Nicolas Fréret) による『シナ人の年代記についての考察 (*Remarques sur la Chronologie des Chinois*)』が添えられている (pp. 355-597.)。

54) Eccard という綴りでは、フランス国立図書館の蔵書目録には記載がない。似た綴りで時期が合う人物を探すと、Johann Georg von Eckhart (1674-1730) が有力と思われる。

55) ヘロドトス『歴史』4巻23節。

56) Le Comte, *op. cit.*, t. 1, p. 262。ここまでは原文の丸写しであるが、最後の関係節が省略されている。参考のため、その部分を掲げておく。「彼らは常に道徳を理性に合致するように保ち続けてきたのである。」

楽のように聞こえ、真の調和が感じられるが、それがシナ語の本質であり、特徴である。同書⁵⁷⁾。シナの文字に関することも、言語に劣らず奇妙である。われわれのアルファベットは様々な要素を含み、いわば発話の原理を備えているが、彼らはこのようなアルファベットを持っていない。アルファベットの代わりに、王国ができて間もない頃に彼らが使用していたのが象形文字である。その数は80000以上だった。同書⁵⁸⁾。テオフィル・スピゼリウスはシナの文芸について論文を一本著した。『シナの文物について』。在バタヴィアのインド会社の第一医師アンドレ・クライヤー [André Cleyer] は、1682年にフランクフルトにおいてシナ医学に関する考察をラテン語で出した。『シナ医学見本⁵⁹⁾』。

<1743S シナの文字のうち、他の文字と組み合わせると意味をなさないものは一つもない。たとえば災 [Tsai] という字である。これは不幸や災害を意味するが、家を意味する《 [Mien] と火を意味する火 [Ho] から成っている。なぜなら、最大の不幸は自分の家が燃えるのを目の当たりにすることだからである⁶⁰⁾。つまり、シナの文字はいずれも象形文字で、イメージをかたどる思想を表明しているのである。>

<1743S シナ書法においては、個々の概念ははっきりと分かる印を持っている。そのため、今日でも依然として個々の概念が近隣諸民族の間で共通のままになっている。それでいて異なる言語を話しているのだから、これは絵画における普遍文字と同じようなものだと言える。シナの文字は事物を指すのであって、語を指すのではない。コーチシナ、トンキン、日本の文字は、シナの文字と同じで

57) Le Comte, *op. cit.*, t. 1, pp. 370-371. ル・コントの原著においては、「一音節しか聞き分けられないようなものなのである。」と「同じ単語を」の間に、これでは単語の数が足りないので工夫が必要である旨が記されている。『トレヴー事典』の項目執筆者は、使えそうな部分のみを取り出し、丸写しにしている。

58) Le Comte, *op. cit.*, t. 1, pp. 381-384. 原著の利用法は先ほどと同じで、要約せずに必要箇所のみを写している。

59) Cleyer, *Specimen Medicinæ Sinicæ*, Francofort, 1682. フランス国立図書館の蔵書目録によると、本書の著者として Boym と Cleyer の二人の名前が出ているが、これはクープレ師が送ったボイムの原稿をクライヤーが出版したためである。本の表紙にはクライヤーの名前しか記載されていない。(BnF : 4-TD16-20)

60) この解釈の出典は未詳だが、学問的には不正確らしい。《》はサイと読み、水害を示す字であるという。よって、災は水災と火災を合わせたものということになる。白川静『字統』。

あり、同じ事物を指す。とはいえ、これらの民族は話すときは同じようには表現しない。その点において、これらの文字は算用数字のようなものである。複数の民族が使用し、異なった名称を与えているが、指示する事物はいたるところで同一である。これらの文字は八万にも達する。こうした書法は簡潔に洗練された象形文字にすぎない。これは人間の抱く概念を描くために用いられた原初の単純な方法に発している⁶¹⁾。>

シノワーズ [CHINOISE]。園芸用語。珍しい三色のナデシコである⁶²⁾。白い部分が大きな茶色の羽飾りによって区切られているのだが、その羽飾りはまるで黒かばら色のようなものである。花は大ぶりでである。モラン [MORIN⁶³⁾]。これはまた赤紫色のチューリップでもある。やや灰色がかっており、赤く、淡い黄褐色である。同書。

Dictionnaire de Trévoux, 1721, t. 1, colonne 1771.

2 朝鮮関係項目

コレ [CORÉE]。男性名詞【1752 女性名詞⁶⁴⁾】。Corea。コレはアジアの大きな半島で、王国の称号を持つ。シナに隣接し、日本側に当たる。この国についてはマルティヌス [Martinus] を見よ⁶⁵⁾。

Dictionnaire de Trévoux, 1721, t. 2, colonne 239.

61) この段落の記述はデュ・アルド『シナ帝国全誌』第二巻「シナの言語について」という章に基づく。

62) 中国産のナデシコについては、トゥルヌフォルがパリ王立科学アカデミーの年報で報告している。Tournefort, «Description de l'œillet de la Chine», in *Mémoires de l'Académie Royale des Sciences, année 1705*, pp. 264-266. 報告の時期から考えて、トゥルヌフォル論文は典拠として最も有力なはずであるが、その記述が『トレヴー事典』に活かされた形跡は認められない。

63) このMORINが何を指すかは特定できなかった。

64) 現代フランス語では女性名詞として扱われる。次注で触れるマルティニ師の『シナ新図』ではCoreaという表記が採用されているが、名詞の性を判別する手がかりとなる冠詞は添えられていない。

65) Martini, *Novus atlas sinensis*, pp. 207-209. マルティニ師の『シナ新図』は、中国の十五の省について記述した後、遼東 [Leaotung]、朝鮮 [Chaosien]、日本 [Japon] について略述している。

3 日本関係項目

日本 [JAPON]。男性名詞。アジアの大帝国を指す {1771 固有} 名詞。Japonia, Japonicæ Insulæ。複数の島から成るが、そのうちの三つが他を圧倒している。すなわち、他の島をすべて合わせたよりも大きい日本 [Nippon 本州のこと]、下 [Ximo] 別名西国 [Saicoock]、四国 [Xicoco, ou Tokoesi⁶⁶⁾] である。列島の西はシナであり、北は東韃靼と蝦夷 [Jesso] の土地である。東と南は東大洋に洗われている。列島は経度171度から188度、緯度31度から40度にかけて広がっている。空気は温暖にして健康的、土地は山がちではあるが大変肥沃で、大麦や米、トウモロコシその他数種類の産物に恵まれている。しかし、それよりも重要なのは金山と銀山である。また、大きな赤真珠が大量にとれ、白真珠と同じくらい珍重されている。列島全体は内裏 [Dayro] によって統治されている。内裏は宗教の長であると同時に国家の長でもあった。しかし、約百六十年前【1771 久しい以前⁶⁷⁾】のことであるが、内戦によって国は破壊され、66の王国 [Royumes] に分割された⁶⁸⁾。そのうち、日本島とそれに隣接する島々に58の王国が含まれており、下には9、四国 [Chicoock] に残り四つの王国がある⁶⁹⁾。1550年に新しい皇帝が公方 [Cubo] という名で位に上り、これらの王国を糾合して州 [Provinces] とした。元の内裏 [Dayres] の後継者に対しては、彼らが宗教の長の資格において保持していた権威しか認めないようにし、そのうえで全国を七つの地方 [contrées] に分割した。日本島には山城 [Jamaïstero]、越前 [Jetsengen]、越後 [Jetsengo]、関東 [Quanto]、奥州 [Ochio] の五つが含まれており、残り二つは下、四国 [Chicoco] 両島である⁷⁰⁾。この国には美しい都市が多くある。主なものとしては、昔の首都で今は内裏の居所となっている都 [Méa-

66) 原語未詳。

67) 少し後の本文に1550年という日付があり、それから逆算すると1710年頃が基準になっていることになる。後述のように、1717年にこの項目の原形が執筆され、それがそのまま後の諸版に受け継がれていったと考えて差し支えなかるう。

68) 老岐と対馬を除く六十六箇国を指すのだろうが、このように分けられたのはもちろん戦国時代のことではない。この後にも史実に合わない記述が続く。

69) 全部足すと71になり、数が合わない。畿内五箇国を二重に数えたのだろうか。

70) 正確には、七道とは東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、西海道、南海道の七つであり、南海道には四国の他に紀伊と淡路が含まれる。同じ間違いはフランソワ・カロンの『日本大王国志』にも見出される。

co]、および新しい首都で公方の居所となっている江戸 [Yendo] がある。マティ [Maty⁷¹⁾]。ラ・サール氏 [M. de la Sale⁷²⁾] によって派遣されたフランスの兵士は、この司令官の死後、カナダ西部のアカニバ族 [Accanibas] のもとまで踏み入った。そして、彼らが西方十二日の距離にいる民族と交易し、自分たちの金と引き換えに鉄を受け取っているという話を聞き出したと伝えている。この兵士はそれが日本人だと判断した。

{1771 当地にはまだキリスト教徒が残存していると信じるに足る理由がいくつかある。周知のように、シナの陶磁器職人のもとに、壺に十字架を描いたものをいくつか作ってくれという注文が日本から届いたことがある。さらには、数年前に広東に人を寄越してシナ人キリスト教徒にオスチャ [聖体のパン] を求めたとさえ言う人がある。本年 (1717年⁷³⁾)、モスコヴィア経由でもたらされた知らせによると、二人のイエズス会士と一人の在俗司祭がかの地に潜入したところ、非常に善良なキリスト教徒を大量に見出したという。女たちは子供に洗礼を受け、しっかりと教育するよう十分配慮していたということだ。とはいえ、これにはまだ確認が必要である。}

日本島。NIPHON を見よ。

<1771 ジャポン [JAPON]。男性名詞。通商用語。日本からわれわれのもとにもたらされる陶磁器に与えられる名称である。このカップは古いジャポンだ。>

<1743S ジャポネにする [JAPONNER]。動詞。陶磁器の取引を行う商人はこの用語によって、シナの陶磁器に対してオランダかイングランドで今一度行う焼き入れを指している。彼ら商人はシナの陶磁器を日本のものとして通用させ、

71) 詳細は未詳だが、Maty, *Dictionnaire géographique universel*, Amsterdam, 1701. (BnF : G-3481) の可能性がある。

72) Robert Cavalier de La Salle (1643-1687) のこと。

73) この項目が最初に登場したのは1721年版であり、その四年前に執筆されたという手がかりになる。ちなみに、項目シナは1715年に書かれたと考えられるので、二年の差があることになる。

値段を引き上げようと望んでいるのである。『通商事典』を見よ⁷⁴⁾。>

日本人 [JAPONOIS, OISE]。男性名詞および女性名詞。民族を指す固有名詞。日本のもの。日本の住人。Japo. 日本人はシナ起源である。大柄でたくましく、誇り高く残忍である。逆境にめげず、戦闘的で、戦争にあってはいかなる不便をもやすやすと耐え忍ぶ。火器や刀、槍の使用を知ってはいるが、今でも弓矢を用いている。偶然の作用や罵詈雑言、嘘や盗みを憎む。外国人を警戒すること甚だしく、オランダ人のみが港への出入りを許されている。というのも、オランダ人のみが進んで十字架を足で踏みにじるからである。オランダの船が入港すると、武装を解かれる。役人が積荷の目録を作成し、荷を下ろさせる。代わりに金や銀、さらには彼らの気に入るままにその他の物産を積み込んだ後、武器が返却され、出航の日取りが決められる。この取引において、彼らは判事であると同時に当事者でもあるのだが、それにもかかわらず、公平の原則を律儀に守っているという。彼らは偶像崇拝者である。主な神は釈迦 [Xaca] と阿弥陀 [Amida] である。男女ともにおびたしい数の修道者がおり、自分たちの崇める偶像に身を捧げている。これを坊主 [Bonzes] と呼んでいる。イエズス会の聖フランシスコ・ザビエル [Saint François Xavier] は、1549年頃、当時この国で取引をしていたポルトガル人のはからいによって、福音を説き、大勢の人を改宗させた。前世紀初頭、ブリュッセル生まれの某フラマン人が手紙を一通偽造して、ポルトガル船から見つかったと言い立てた。そこには国内にいるキリスト教徒の手引きによって国を乗っ取るとういう計画が記されていたのである。フラマン人がこの手紙を皇帝に見せたところ、皇帝は老若男女を問わずポルトガル人を皆殺しにした。それ以来、代々の後継ぎは国内でキリスト教について語ることを許していない。

74) Savary, *Dictionnaire universel de Commerce*, 1741, t. 2, p. 1666. «JAPONNER» すでに述べたように、ほとんどの場合、『トレヴー事典』は『通商事典』の冒頭部だけを丸写しにしている。ここでも、原著の同名項目の前半が字句を変えることなく転記されている (ただし、見出しの綴りは P が一つ減らされている)。省略された後半部を参考までに掲げる。「普通、シナの陶磁器は白と青なので、これを赤く彩り、さらには花や金の網目模様を付け足すという趣向が考え出された。しかし、それでは本物のジャポンよりも輝きが強くなりすぎる。そこで、このように新たに付け足した色合いをなじませるために、火にかけるのである。これに騙される人は多いが、目利きは騙されない。」

ヨーロッパ人宣教師数名および現地の無数のキリスト教徒は、教えに殉じ、ありとあらゆる辛酸を嘗めた。その様は初期の教会と同じように毅然として、勇敢なものであった。{1771 日本の女は男よりも好奇心が強い。ブーウール [BOU H.⁷⁵⁾]} 日本人はまことに実直で、気高く、寛大な国民であり、何にも増して名誉を重んじる。他のいかなる野蛮な民族も、善良さにおいて日本人にはかなわない。日本人は闊達な精神の持主で、詐欺や不正への性向とは無縁である。ザビエル書簡集第三巻第五書簡。

日本の、日本語の [JAPONOIS, OISE]。形容詞。日本に属するもの。 *Japonicus*。日本の長崎 [Nangazaki 【1752 Nangazali】] で印刷された日本語の辞典がある。ドミニコ会士ディダクス・コラド師 [le P. Didaque Collado] が作成し、1632年にローマで印刷された四折版の日本語辞典もある⁷⁶⁾。こちらは日本語とラテン語のものであり、先ほどのものはポルトガル語と日本語の辞典である。日本語で説教する。ブーウール。

カロン [Caron] によるラテン語で書かれた日本の描写⁷⁷⁾の他に、ヴァレニウス [Varenus] によるもの⁷⁸⁾、ブシェダ [Buxéda] によるスペイン語の日本王国史、アルノルドゥス・モンタヌス [Arnaldus Montanus] がドイツ語で書いたもの⁷⁹⁾がある。他にも、この国と民族に関わる言及は数多く見られる。聖フランシスコ・ザビエルの書簡集では第二巻第六書簡、第三巻、第四巻、マッ

75) Bouhours, *La vie de S. François Xavier*, Paris, 1682. (BnF : H-4609, OO-716) を指すものと思われる。

76) Didacus Collado, *Ars Grammaticæ Japonicæ linguæ*, Romæ, 1632. (BnF : SMITH LESOUF R-10625)

77) カロンの『日本大王国志』は、まず1645年に他の文献の付録という形でオランダ語の原版が出た。その後1648年にオランダ語の単行本が出版され、翌1649年にラテン語版が発行されている。このラテン語版というのは、次注に記すヴァレニウスの編者に外ならない。この点については、『日本大王国志』の日本語訳（平凡社東洋文庫）に収められた幸田成友による「日本大王国志の写本及び版本」を参照のこと。

78) Bernhardus Varenus, *Descriptio regni Japonicæ et Siam*, Amsterdam, 1649. (東洋文庫 : O-17-a 1 ; 一橋大学社会科学古典資料センター : Lat. 419) 2000年にドイツ語版が出た。 *Beschreibung des Japanischen Reiches*, München, 2000.

79) モンタヌスの『オランダ東インド会社使節日本皇帝訪問記』を指すが、ドイツ語版については詳細未詳。オランダ語版は1669年、英語版は1670年、フランス語版は1680年にそれぞれ出版されている。フランス語版について言えば、1722年に内容を縮小した八折版が出ている。

フェイ [Maffée] のインド史⁸⁰⁾では第十二巻、ラテン語で書かれたイエズス会の歴史では第一部の第九巻と第十一巻、第十五巻、第二部の第四巻、第三部の第二、五、六、七巻、第四部の第三巻、第五部の第三、四、六、九、十一巻、イエズス会士ルイス・グスマン [Louis Guzman] によるスペイン語のシナ日本布教史⁸¹⁾、日本へのオランダ使節、ブーウールによる聖フランシスコ・ザビエル伝の第五巻、クラッセ師 [le Pere Crasset] による日本教会史⁸²⁾、アルガンブ [Allegambe] の輝かしき死者たち⁸³⁾、ヴォッシウス [Vossius] の偶像⁸⁴⁾では第一巻の第8章と25章⁸⁵⁾。

<1743S 日本語 [JAPONOIS]。男性名詞。日本の言語。 *Japonica lingua*。日本語で説教する。ブーウール『ザビエル伝』第五巻。日本には全国でただ一つの言語しかない。しかし、あまりにも過剰で雑然としているので、いくつかの言語があるようなものである。くだけた会話ではある種の単語や文を用い、もったいぶった会話では別の言い回しを用いる。身分の高い人々は庶民とはまったく別の言葉遣いをする。商売人や兵士には彼らなりの言葉遣いがあり、女には女だけの言い方や表現がある。高邁な話題を論じ、たとえば宗教や国家を語るときには、特別な用語を使う。異なった話し方を混同するような真似をすれば、それはひどく場違いな失敗となるだろう。>

Dictionnaire de Trévoux, 1721, t. 3, colonnes 790-791.

-
- 80) Maffei, *L'histoire des Indes orientales et occidentales*, Paris, 1665. (BnF : NUMM-58017 電子テキスト)
- 81) Luis de Guzman, *Historia de la misiones... en los reynos de Japon*, En Alcara, 1601, 2 vol. in-fol. (BnF : FOL-O 2 K-498)
- 82) Jean Crasset, *Histoire de l'Église du Japon*, Paris, 1689, 2 vol. in-4°. (BnF : O 2 O-148 ; 東洋文庫 : O-17-C 69)
- 83) Joannes Nadasi et Philippe Alegambe, *Mortes illustres*, Romæ, 1657. (BnF : H-1783)
- 84) Isaac Vossius (éd.), *De Idolatria liber*, Amsterdam, 1642. (BnF : G-7882 (1))
- 85) 日本に関する文献の一覧は、1721年版から1771年版に至るまで、一切変更がない。18世紀を通してヨーロッパにおける日本認識の原型を提供したケンベルの『日本誌』(1727年発行)も、それを強く意識していたシャルルヴォワ師の『日本史』(1736年発行)も無視されている。

Ⅲ 『トレヴー事典』の東アジア関係項目の特徴

1 典拠

すでに指摘したように、二次資料の分析に際しては、言われたことと言われなかったことの両方を考慮に入れなければならない。このうち、言われなかったことには二種類あって、そもそも情報が欠落していて書きようがなかったのか、情報はあったが不必要と判断されたかによって、意味合いが異なってくる。その区別を立てるには、項目執筆時において利用可能だった情報の範囲を確定しなければならない。したがって、『トレヴー事典』がどの文献を典拠として利用したかを調べる必要が生ずる。

中国については項目 CHINE において、日本については項目 JAPONOIS において、それぞれ参照すべき文献が掲げられており、これが手がかりになる。この文献リストはどの程度網羅的と言えるだろうか。

まず、項目 CHINE で言及された文献を検討してみよう。キルヒャーの『シナ図説』、マルティニの『シナ新図』、スピゼリウスの『シナの文物について』、トリゴアの『シナ王国誌』、セメードの『シナ帝国誌』、プレイエリウスの『シナとヨーロッパ』、ニキボサの『報告記』、ル・コントの『シナ現状新誌』、以上が1721年版以来一貫して挙げられている文献であり、1743年版からはデュ・アルドの『シナ帝国全誌』が追加された。この一覧を眺めてすぐに気がつくのは、17世紀にイエズス会士によって書かれたものが大半を占めることである。とはいえ、身最眞という批判は当たらない。項目が執筆された1715年において、これらが中国に関する主要な文献であったことは紛れもない事実だからである。抜け落ちたものを探すとすれば、中国布教の基礎を築いたマテオ・リッチの著作や、クープレ師らによる儒学の古典のラテン語訳くらいであろう。デュ・アルドの著作が追加されたことも含め、中国に関する文献の指示は適切である。

次に、項目 JAPONOIS で言及された文献であるが、こちらは1721年版から1771年版までずっと同じままである。カロンの『日本大王国志』、ヴァレニウスの『日本シャム王国誌』、ブシェダの『日本王国史』、モンタヌスの『オランダ東インド会社使節日本皇帝訪問記』、ザビエルの『書簡集』、マッフエイの『東西イ

ンド史』、『イエズス会の歴史』、グスマンの『シナ日本布教史』、ブーウールの『聖フランシスコ・ザビエル伝』、クラッセの『日本教会史』、アルガンブの『輝かしき死者たち』、ヴォッシウスの『偶像について』——と、このように並べてみると、数の上では中国に関する文献より充実しているようだが、質がやや落ちる観は否めない。17世紀前半に書かれたものが目立ち、情報が古びている。これは日本から宣教師が追放された影響であり、やむをえない面もある。しかし、最後までケンベルに言及しなかったことは、文献リストとしては致命的な欠陥である。

ここまでは、項目の中で挙げられた文献が網羅的かどうかを検討してきたが、『トレヴー事典』はそれらの文献すべてを典拠として利用したわけではない。直接の影響関係を認定しうる文献はどれであろうか。

中国については、脚注で逐一対応関係を指摘したように、ル・コントの『シナ現状新誌』をそのまま写した箇所が非常に多い。ル・コントのつぎはぎによって項目の骨格が形作られていると言ってもよいほどである。ル・コントは、新しく、信頼が置け、広範な主題を扱っている。要するに、項目執筆時においてこれ以上の文献は他になかった。ル・コントに依拠するのが最善の方法だったのである。

日本については、ル・コントに相当する文献を特定できなかった。日本の地誌などは元をただせばカロンに行き着くのだが、これは孫引きである可能性がある。本文中に示された典拠とおぼしきマティの『地理事典』を調査できなかったのも、この点については断定を控える。いずれにせよ、日本に関する文献は、全体的に古く、そのまま写せるものが少なかったはずである。

2 言われたことと言われなかったこと

さて、以上で材料は出揃ったので、決算報告に移ることにしよう。『トレヴー事典』の東アジアに関する概論諸項目において、何が言われ、何が言われなかったのか。

まず、『トレヴー事典』で触れられたテーマを並べてみよう。中国関係項目で扱われたテーマを順番に挙げると、地理、政治制度、宗教（ただしキリスト教がほとんど）、言語辞典としての用例、文献案内、工芸（1771年版での追加）、古代

史、人類学、言語（文字）、植物学となる。朝鮮については、具体的情報は皆無に等しい。日本に寄せられた関心は、地理、近代史、工芸（1743年版補遺や1771年版での追加）、人類学、通商、宗教（現地の宗教とキリスト教）、文献案内、言語に及んでいる。

中国と日本に共通しているのは、キリスト教、人文地理、言語、書誌である。これらはいずれも布教の問題に収斂される。つまり、布教に赴く土地の特徴はどうか、改宗させるべき現地の人々はどのような言語を話すのか、どのような本を読めば予備知識が得られるのか、といった問題意識を読み取ることが可能であろう。そのような観点に立つと、言語辞典の機能を果たすために盛り込まれた用例までも、布教活動と関わりが深いことに気づく。「シナに行く」のも「シナにとどまる」のも宣教師の行動であり、「日本語で説教する」のも宣教師の務めである。さらに、歴史の扱い方が日本と中国とで違うのも、キリスト教との関連で説明できる。日本については「約百六十年前」（1771年版では「久しい以前」）から後の最近の歴史が述べられているが、「某フラマン人」にそそのかされてポルトガル人を皆殺しにしたのは新しく出現した「皇帝」である。迫害の歴史を省略することはできない。一方の中国においては、「皇帝は絶対的」だが、「現在（1715年）統治している」（あるいは「1715年に統治していた」）皇帝はキリスト教に好意的で、今のところ迫害は起こっていない。迫害があったのはキリスト教がもたらされて間もない頃で、その間の事情は景教碑文の由来ともに記されなければならない。また、聖書の年代記との整合性を保つためにも、中国の歴史は「四万年以上」ではなく「四千年以上」に縮めておく必要がある。中国について言われたことも、日本について言われたことも、護教的意図に発しているのである。

それでは、『トレヴー事典』で無視あるいは軽視されたテーマにはどのようなものがあるだろうか。習俗、自然科学、芸術についてはまるで触れられていない。博物学、現地の宗教、工芸への言及はほんのわずかである。中国における通商の実態や、日本の政治制度も紹介されていない。このうち、『トレヴー事典』の項目筆者にとって、情報が当初から欠落していて書けなかったことと、材料はあったがあえて言及しなかったことを区別してみよう。

欠落していた情報の最たるものは、文学、絵画、音楽といった芸術である。こ

のうち、絵画については工芸品に描かれたものがヨーロッパにもたらされているので、完全な欠落とまでは言えない。中国の文学と音楽が知られるようになるには、デュ・アルドの著作の出現を待たなければならないが、それにしても限定的な紹介にとどまっている。日本の芸術についてはほとんど何も知られていなかったに等しい。自然科学については、天文学と医学以外には注意が向けられていない。したがって、芸術と自然科学が無視されていたのは状況の帰結であって、『トレヴー事典』の意図によるものではない。しかし、それ以外のほとんどの分野では、不完全ながらも何らかの情報が伝えられている。『トレヴー事典』が取り上げる必要を認めなかったテーマを順番に検証することにしよう。

上述の通り、自然科学のうち天文学と医学は例外的に関心的であった。清の宮廷でイエズス会士が重用されたのは、天体観測の知識が豊富で暦の作成が正確だったからである。西洋天文学の方が正確であることを示すには、中国の天文学を研究し、その欠点を衝く必要があった。しかし、中国の天文学をわざわざヨーロッパに紹介するには及ばない。また、膨大な観測記録は概論項目にはなじまない。医学については脈拍の理論が詳しく研究されたが、中国人の築き上げた理論体系は複雑すぎて、簡単に紹介することは不可能である。そこで『トレヴー事典』はクライヤー（実際の著者はボイム）の『シナ医学見本』を参照すべき文献として掲げるとどめている。

博物学は18世紀を代表する学問である。特に、標本採集の容易な植物学の発達が目覚ましかった。外国の珍しい植物は、珍しいというその理由だけでも記述するに値する。ヨーロッパ各地のアカデミーの論集には、中国や日本の植物を紹介した論文が好んで掲載されている。ボイムの『シナの植物』やケンペルの『廻国奇観⁸⁶⁾』といった独立した一書も存在した。それにもかかわらず、シノワーズと呼ばれるナデシコ的一种にしか言及されていないのはなぜだろうか。この疑問は、『トレヴー事典』の別の箇所を読めば氷解する。たとえば、GINS-ENG とい

86) Kämpfer (Engelbert), *Amœnitatum exoticarum*, Lemgow, H. W. Meyeri, 1712. (BnF : 4-O2 H-308 ; 東洋文庫 : O-2-A 36) 本書の第五章 (pp. 765-912.) は日本植物名鑑になっており、日本の植物を大きく五種類に区分して描写している。

う大項目⁸⁷⁾では朝鮮人参の形状や効能が事細かに記されており、読者は十分な知識を得ることができる。つまり、博物学は各論に委ねられているのであって、無視されているわけではない。ナデシコが目に留まったのは、たまたまシノワーズという名前で呼ばれていたからにすぎない。

習俗や工芸やについても事情はほぼ同じで、『トレヴー事典』の随所に各論項目が見出される。たとえば、ル・コントは中国人の風習として、彼らが変わった縁なし帽をかぶり、人前では決してこれを脱がないと指摘しているが、その記述はそのままの形で『トレヴー事典』の BONNET という項目に取り込まれている⁸⁸⁾。また、工芸品のうち最も関心の高かった陶磁器についても、ダントルコール師 (d'Entrecolles) による詳細な報告⁸⁹⁾こそ取り入れられていないものの、ごく簡単な記述なら見出される⁹⁰⁾。

このように、概論で触れられていないテーマを検証してみると、もともと情報が不足していて書けなかったり、各論に回されたりというケースがほとんどであることが分かる。しかし、概論で扱うのが適切でありながら、なおかつあえて言及されなかったテーマが残されている。すなわち、現地の宗教である。『トレヴー事典』の概論項目は、現地の宗教について何を語っているだろうか。中国には「主要な宗教が四つある」という。そのうちの最後のものはキリスト教であり、残りは「唯一の神」を認める古い宗教、偶像崇拜、無神論であるとされる。それぞれの宗教がどのような教義を有しているかは説明されていない。日本人は「偶像崇拜者」であり、「釈迦」と「阿弥陀」を神として崇めている。また、以前の

87) *Dictionnaire de Trévoux*, 1721, t. 3, colonnes 210–214. «GINS-ENG» この項目は、『イエズス会士書簡集』に収められたジャルトゥー師の書簡 (1711年4月12日付) に基づいている (*Lettres édifiantes et curieuses*, t. 10, pp. 159–185)。

88) Le Comte, *op. cit.*, t. 1, pp. 282–283. および *Dictionnaire de Trévoux*, 1721, t. 1, colonne 1115. «BONNET»

89) ダントルコール師は二度に分けて景德鎮の陶磁器について詳細な記録を残した。一通目は1712年9月1日付、二通目は1722年1月25日付となっている。この書簡は『中国陶瓷見聞録』という題で日本語訳が出ている (平凡社東洋文庫363、小林太郎訳)。

90) *Dictionnaire de Trévoux*, 1732, t. 4, colonnes 982–983. «PORCELAINE» 1721年版の第4巻は電子テキスト版を閲覧できないので、代わりに1732年版における所在を示す。

日本では「内裏」が「宗教の長であると同時に国家の長でもあった」のが特徴である。中国と日本の宗教について述べられていることは以上であり、キリスト教の布教史が詳述されていることと著しい対照をなしている。

もっとも、現地の宗教を特別視すべきではない、という反論はありうる。概論項目で扱われていなくても、博物学などと同じように各論に相当する項目があれば十分だという考え方である。確かに、現地の宗教に関する各論項目は存在する。たとえば、AMIDA という項目を読めば、日本人が阿弥陀の名を口にすることで幸せになれると信じていることが分かる⁹¹⁾。しかし、他の事典と比較すれば、概論項目で現地の宗教に触れないことが、『トレヴー事典』ならではの特色であることが分かる。たとえば、モレリの『歴史大事典』の項目 CHINE には「宗教」という小見出しがある。後半の主題は景教碑文を中心とする布教史だが、その前に現地の宗教が論じられている。項目 JAPON では、「日本人の宗教について」という小見出しと「日本におけるキリスト教の発展」という小見出しが分けられており、前者は後者の三分の一程度にすぎないが、日本人の宗教について何がしかの観念を得ることはできる。さらに一步進んで、概論項目では布教史にあまり触れず、もっぱら現地の宗教に焦点を絞った事典もある。『百科全書』である。『百科全書』には「哲学史」と呼ばれる一連の項目が存在する。これは主としてディドロが執筆したもので、ブルッカーの『哲学の批判的歴史⁹²⁾』に依拠している。*CHINOIS, (PHILOSOPHIE DES)と*JAPONOIS, PHILOSOPHIE DES がその哲学史項目に相当するが、いずれも見出し語が民族名になっていることから明らかなように、概論として位置づけられている。キリスト教への言及がないわけではないが、記述の重心は中国人や日本人の間で古くから広まっている教え、すなわち儒教や仏教さらには道教や神道にある。

まとめよう。『トレヴー事典』の東アジア関係概論項目は、イエズス会の活動を反映し、キリスト教との関わりを軸に執筆されている。『トレヴー事典』にとっては、それこそが概論で扱われるべき主題であり、その他は各論に回しても

91) *Dictionnaire de Trévoux*, 1721, t. 1, colonnes 347-348. «AMIDA»

92) Brucker (Jacob), *Historia critica philosophiae*, Lipsiæ, B. C. Breitkopf, 1742-1744, 5 vol. in-4°. (BnF: R-2428 / R-2432)

差し支えないものだったのである。

IV むすび

17世紀末以降、フランスでは東アジアに関する情報が飛躍的に蓄積されてゆく。その結果、旅行記とは別の二次資料においても東アジアへの言及が増大した。特に、中国はその歴史の古さといい、整備された官僚機構といい、論争のテーマに事欠かない。中国は思想史上の課題となったのである。

一次資料と二次資料では、素材の扱い方に違いがある。一次資料の特徴は書き尽くすことである。イエズス会宣教師たちは、中国からヨーロッパに向けた書簡の中で、あらゆるテーマを話題にした。中国の現状を詳しく報告することは、布教の成果を誇るのに役立った。これほど長い歴史をもつ国で多くの人々を改宗させたのだから、キリスト教の力は偉大であり、イエズス会はその偉大さを示すのに貢献した、というわけである。ル・コント師の著作は、表題が示すように、まさしく包括的な現状報告であった。これに対して、二次資料の特徴は選別することである。何もかも述べるのではなく、必要なものだけを選び取り、残りは切り捨てる。『トレヴー事典』にとって、必要な要素とは布教史であり、東アジア関係の概論項目もその観点から執筆されている。こうした特徴は、言われたことだけでなく、言われなかったことをも視野に入れることによって、初めて明らかになるのである。

最後に、今後の検討課題を指摘しておこう。まず、『トレヴー事典』内部の問題として、各論項目を調査する必要がある。『トレヴー事典』が全体としてどのような東アジア像を提示していたかは、概論と各論を総合的に分析しなければならない。次に、他の著作との比較をしなければならないが、比較の対象は二つある。一つは『百科全書』を始めとする事典類であり、もう一つは『トレヴー評論』である。事典類との比較について言えば、概論項目において現地の宗教の扱いがどう違うのかを、モレリと『百科全書』を取り上げて検討したが、もとよりこれだけでは不十分であろう。『トレヴー評論』については、今回はまったく言及できなかった。『評論』は定期刊行物であり、『事典』のように半世紀にわたって同じ情報を流し続けることはない。『事典』で無視されたケンベルが『評

論』でどのような扱いを受けているかなど、興味深い論点をいくつか見出せるであろう。